慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本文化史概説(村岡典嗣著, 岩波書店刊行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.185(331)- 186(332)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ハンチントン氣候と文明（間崎万里譯　岩波文庫版）

地理的環境論は既にギリシヤ時代から行はれたものであつて、かのヘロドツスはエジプト文明の基礎となれる地理的條件を强調し、ツキユデイデスはギリシヤ文明に於ける地理的要素の重要性に對して注意を喚起し、またストラボーとデイオドラス・シキユルスも詳細なる地理的知識の重要なることを知つてゐた。近世に入つては、ボダン、モンテスキユー、ヘルデル、バクル等に於てこの環境論の發展をみるのであるが、更にかのラツツエルに至つて人類文化の地理的環境による制約性が最も完備せる體系に於て强調され、環境決定論は一世を風靡した。このラツツエルの學風は更にセンプル及びハンチントンといふ二人の優れたアメリカ地理學者によつて繼承され、ハンチントンは特に氣候の人文活動への影響を說いて世界の地理學界に呼びかけた。所謂氣候史觀を說いた氏の論著は決して二三にとゞまらないが、その最も代表的なものがこの「氣候と文明」(E. Huntington: Civilization and Climate, 1915) であつて、本書の學問的價値に就ては茲に改めて喋々するまでもなく、既に學界に定評があり、近世地理學史上に不滅の記念塔となつてゐる。間崎教授による本書の邦譯は既に大正十一年に舊中外文化協會から出版され、その內容に就ては本誌第二卷第一號に於て松本信廣教授が詳細に紹介して居られる。然し舊版は右協會員の間に頒布されたものであつて、その讀者は極めて小範圍に限定されたが、今や舊譯に若干の訂正が加へられ、完全なる邦譯として岩波文庫に收めて刊行され、我が地理學界に提供されることゝなつた。これ寔に學界の爲に慶賀に堪へざるところであり、必ずや地理學徒の間に絕大なる歡迎をうけるであらう。（有賀春雄）

日本文化史概說（村岡典嗣著　岩波書店刊行）

本書は「本居宣長」「日本思想史研究」等の著者として、神道史の權威として令名ある村岡典嗣氏の近著である。

氏は本書の序說に於て、文化の意義內容を次のやうに規定してゐられる。

「文化は文明に對してやゝ內的の性質を有する。後者の物質的文明に對して、いはゞ精神的文明といふほどの差がある。隨つてまた、その基調として文明の功利主義的傾向に對して、文化は理想主義的傾向を有する。かくて同じく文明現象としても、外部生活の發達たる法律、制度、產業等の方面を、文明の領域とするに對して、宗教、學問、藝術等のたぐひが、自然文化の主要の題目となり來る傾きがある。」

本書は終點を德川時代末において五期に分けられてある。卽ち太古上古中古中世近世である。著者は明治以後に說き及ばれな

い。その理由は、日本文化は支那大陸文化を攝取して德川時代までに一通りの生長を遂げ、明治の開國と共に國際的國家として登場し、歐米文化輸入後は全く新たな時代に入つたものといはなければならない。故に日本文化史は大きく明治を境としてその前後に分つべきで、後者卽ち明治以後の文化史は嚴密には學的不可能事といはなければならない。この見地から嚴密なる意味に於ての日本文化史は寧ろわれわれに課せられた將來の課題でなければならないからである。

本書は僅々百二三十頁の小册子であるが、從來の學問藝術宗敎等の數項目の羅列に過ぎなかつた所謂日本文化史とは異り、前述の如くはつきりした文化史觀に基き各時代を概觀したもので、この方面に類書の少い今日一讀に値すると思ふ。（四六判一三四頁定價五十五錢）（淺子勝二郎）

日本神話研究（肥後和男著　河出書房發行）

故高木敏雄氏の「日本神話傳說の研究」、松村武雄博士の「神話學論考」、松本信廣敎授の「日本神話の研究」等を有するわが神話學界は、新に肥後氏の論文集「日本神話研究」を加へることが出來た。

本書は昭和六年以降、雜誌その他に發表せられた十一篇の論文を年代順に集成せられたものである。その論題を列擧すれば、「素盞嗚尊雜考」（鞍馬の竹切について、山の神としての素盞嗚尊、茨木神社の輪くぐりの神事の三篇を含む）「大物主神について」、「疫神信仰について」、「建御名方神について」、「賀茂傳說考」、「八幡神について」、「稻荷傳說」、「日本神話の觀念」、「國常立尊について」、「日本神話に於ける國家起源の問題」、「倭姫命考」である。

著者は卷頭にその研究上の立場と意圖を明かにし、それを以つて統一的理解へのよすがとされてゐる。著者の立場は、自ら歷史的、民俗的立場といはれてゐる樣に、民俗學的方法によつて古代の民族生活の態樣を明かにし、古代傳承をその生活的基礎に於いて把握しようとするにある。その場合著者は、古代傳承の發展過程の究明に、卽ち古代傳承の歷史的研究に主點を置かれるのである。

右の如き著者の立場にとつて、最も大なる困難は民俗的資料と文獻的資料の交涉に在ると思はれる。それは民俗的事象の歷史性の追究と古典の文獻學的批判とを基礎として、初めて正確な關係を論斷し得るのであつて、此の間の勞苦は容易ならぬものがあらう。然もこの立場を『一つの試み』から方法論的確立に至らしめる途は唯一つ、個々の問題に就ての研究の集積あるのみである。かくして文獻史學と民族學との方法論差異を克服し、新しき古代研究の途を拓くことこそ、今後の著者に課せられた使命であらう。

その意味では、更に廣く考古學、人類學等にも援助を求め、それによつて綜合的な古代研究の完成に進まれるのが、著者の所謂新たなる學問の展開に、有效な楔機となるのではなからうか。素よりそれは言ふ可くして爲し難い大事業である。舊稿の集成上に立つた著者は、恐らく今目前に擴がる雲海を隔てゝ古代傳承の秀峰を望まれてゐることであらう。私は著者の今後に大いなる期待